

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520244

研究課題名(和文) 明治二十年前後におけるボール表紙本を中心とした埋没作家・作品の実証的研究

研究課題名(英文) A Study of Forgotten Writers and their Works from the Meiji Era: Rediscovering Bourubyoushibon Novels from Around 1887

研究代表者

池田 一彦 (IKEDA, Kazuhiko)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：10184417

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)： 明治二十年前後の、今日文学史的に忘れ去られたり埋没したりしてしまっている作家や作品の内、見直すべき価値のあると思われるものを、当時流行したボール表紙本を中心として発掘し、実証的に再検討して行くのが本研究の課題である。具体的には、南柯堂夢笑道人＝萩倉耕造の『決闘状』、菊亭静＝高瀬真脚の『滑稽新話明治流行噺八百』(後にボール表紙本として『人間萬事噺の世の中』と改題の上出版された)などの発掘と再検討を試みた。

研究成果の概要(英文)： This project's objectives were: 1) to uncover forgotten literary works, many of them bound in a popular western-style binding called "bourubyoushibon" from around 1887 (the 20th year of Emperor Meiji's reign), 2) to consider whether they were worth reassessing, and 3) if so, to analyze them. Specifically, I unearthed and examined the novel "Kettoujou" by Hagikura, Kouzou (pen name Nankadou Mushoudoujin), and "Kokkeishinwa Meijiryukou Ushohappyaku" (retitled "Ningenbanji Uso no Yononaka" when it was reissued as a bourubyoushibon) by Takase, Shinkei (pen name Kikutei, Shizuka).

研究分野：日本近代文学

科研費の分科・細目：文学。日本文学

キーワード：ボール表紙 埋没作家 埋没作品 明治文学

1. 研究開始当初の背景

明治文学、特に二十年前後の文学研究は、一般に『小説神髓』の坪内逍遙あたりを起点とした文壇文学中心に行われて来たが、文学史を総体的に捉えようとするならば、表向き今日の文学史的記述からは洩れている文学的著作を無視することはできない。今日忘れ去られたり、埋没してしまったりしている作家・作品も視野に入れてこそ、十全な文学史は記述されるのであり、それら埋没作家・作品の掘り起し、再検討は文学史的にも極めて有意義なことと思われる。

本研究に先駆けるものとしては、平成元年から二年にかけて平岡敏夫を中心とした『稿本近代文学』の「明治二十年前後の埋没小説」という企画があり、当時の筑波大学の大学院生が原則一人一作取り上げて論じるということがあったが、その後そうした研究は散発的にしか現れることがなかった。本研究は、その発展的継承を目指すものと位置づけられよう。(なお、常に参照すべきものとして、明治文学研究の高度な達成としての柳田泉の一連の仕事の価値については言うまでもない。)

報告者は、これまで笹の家すずめ『変窟蟻の世界』、大久保夢遊『文明開化地獄極楽一周記』、菊池香鬚『時勢走馬燈』といった作物について論文化してきたが、更にその発展を試みようとしたものである。特に、明治二十年前後は、ボール表紙本という特異な書物形態の物が流行したので、ボール表紙本を中心に埋没している作家・作品を実証的に取り上げてみようと考えた。(本課題研究中にボール表紙本に関する日本語学からのアプローチとして今野真二の『ボール表紙本と明治の日本語』『日本語学講座 第7巻 ボール表紙本』が出たことを付言しておく。)

2. 研究の目的

本研究は、日本の近代文学成立期である明治二十年前後の文学史をより総体的かつ立体的に把握し記述できるよう、今日忘れ去られ時代に埋没してしまっている作家・作品の発掘と再検討を、ボール表紙本を中心に行っていくことを目的とする。従来文学史的記述から全く洩れてしまっているものから、作家ないし作品の名のみ辛うじて各種文学史・文学辞典類に記載されているものの、その内実にはほとんど触れられていないようなものに至るまで、その総数は数え切れない

程あるが、その一つずつでも具体的に明らかにし、価値付けて行くことによって、従来の文学史に新たな知見を加えることができるであろうし、ひいては明治文化の豊饒を再認識することにも通じるであろう。併せて当時流行したボール表紙本の様態も何らか明らかにできればと目論んだ。

3. 研究の方法

明治期に刊行された文学作品の全体像は、村上文庫の『明治文学書目』でそのおおよそを窺い知ることができる。他にも国立国会図書館の『明治期刊行図書目録』や早稲田大学図書館等の所蔵本を基にした『明治期刊行物集成 文学・言語編 総目録』などがあるが、それらを参考に、通常の文学史的記述からは洩れていても、明治二十年前後の文学状況を総体的かつ的確に捉えるために見るべきものを、ボール表紙本を中心にピックアップし、第一次資料としての原本をできる限り収集し、読み込んで、その結果を論文化して行き、本の情報はデータベース化する。

本文に関しては、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーや各種マイクロ資料や複製等が役に立ちすぎるが、書物について詳しい書誌的事項までを知ろうとするには、やはり第一次資料としての原本が不可欠である。ただし、今日、明治本の収集は市場での明治本の枯渇・減少により必ずしも容易でなく、原本を見るためには地方を含む各図書館に出向く必要も生じる。また、自明のことながら、国立国会図書館に所蔵されていない書物も少なからず存在する上、異本・異版と思われるものも実際には多いので、注意が必要である。

本の形態についても、明治十年代から二十年代にかけては、和本に洋装本の上製本や仮製本・仮綴本、ボール表紙本など種々の形態が混在し、また、同じ作品が複数の形態で刊行されるなどということもよくあることだったので、多くの原本を実際に見て行くことが肝要である。内容も、この頃で言えば、政治小説から翻訳物・戯作物に至るまで多岐にわたるが、少なくともボール表紙本の形態を有する戯作物を主に取り上げることにした。

4. 研究成果

期間内に読み込んだ、ボール表紙本を中心とした埋没作家・作品の個々のものについては、多種多様で、限られた紙幅で述べ尽くし

ようもないので（今後随時論文化して行くこととする）ここでは、具体的に期間内に論文化し得たものに即して研究の成果を述べておこうと思う。

先ず、南柯堂夢笑道人・萩倉耕造とその著書『決闘状』について明らかにした。著者南柯堂夢笑道人こと萩倉耕造は、真宗大谷派の僧侶でもあった人で、『決闘状』、『法律擬判詐欺』、『仏教不滅論』と明治二十一年末から翌年にかけて立て続けに刊行、やがて『法雨玉滴』以下多く仏教関係の著述と編集、および布教活動に専念して行った人物である。『決闘状』は、南柯堂夢笑道人の実質唯一の小説で（『法律擬判詐欺』は半ば小説、半ば判決文という、純然たる小説とは言い難い奇作なので）明治二十一年十一月に初版が、明治二十二年二月に再版が刊行された。明治二十年代初頭、「決闘」が各種新聞・雑誌等を賑わし、「決闘」にまつわる単行本も、小説に『決闘奇談文之友』（尺寸廬主人、明治二十一年十月刊）『同胞の決闘』（暁花園霞柳、明治二十二年三月刊）『決闘の果』（黒岩淡香訳述、明治二十四年五月刊）評論に『決闘論』（日戸一郎、明治二十一年十月刊）『憂国至情決闘論』（大場茂馬、明治二十一年十二月刊）『争也君子決闘条規』（光妙寺三郎、明治二十二年一月刊）などが出ていて、西洋から移入の「決闘」ブームが見られた。直接的には、明治二十一年九月政教社の『日本人』記者であった松岡好一が書いた三菱会社高島炭坑坑夫の惨状ルポルタージュを犬養毅が『朝野新聞』で否認したので、松岡が志賀重昂と三宅雄二郎を介添人として犬養に決闘を申し込み、犬養自身の手によって「決闘状」が紙面に掲げられたのに触発されて成ったのが、おそらく夢笑道人の『決闘状』であった。明治二十三年の国会開設を目前にした一種の近未来小説であり、道人の「決闘状」を巡る五つの夢物語をオムニバス形式で綴った短編の連作で、「決闘」への諷刺の意を込めた時事的な戯作小説とも見なせる作品である。今日の目から見ても、一顧の価値ある作物と言えよう。

なお、本作は、初版が仮綴本で、再版がボール表紙本というパターンの形態の書物であるが、国立国会図書館所蔵の初版は本文最終部に欠落があり（落丁本ではない）、早稲田大学図書館本は完備しているということがある。ちなみにそのどちらにもボール表紙本の再版は所蔵されていない（比較上手元に二冊ある内、一冊は科研費で購入した物である）。初版・再版ともに表紙は砂目石版であ

るが、初版は表紙・挿絵とも薄い黄色の着色が施されているが、再版の挿絵は単色の尾形月耕による木版に変えられ、本そのものとしては初版の方が薄冊ながら高級感がある。同一作者による『法律擬判詐欺』は、やはり仮綴本で、表紙に金色の鷺の図があしらわれているが、これはボール表紙本化されなかった。

以上、南柯堂夢笑道人に関しては、科研費外のものながら『法律擬判詐欺』についても別に論文化しているので、その文業・文学的価値についての検討はほぼ尽くせており、文学史的欠落を幾分でも補填し得たものと考えられる。

次に、菊亭静こと高瀬真卿とその著作であるが、高瀬真卿については、戦前柳田泉の仕事があり、最近では長沼友兄による伝記や日記の翻刻があるのであるが、多くの筆名を持ち、特に明治十六年には一年で二十三冊もの著作を物した事など知られながら、その作品の具体的な研究・考察は極めて手薄だった。そこで数ある著作の内、時代の雰囲気をよく映し出している作として、『滑稽新話明治流行噓八百』を取り上げ論文化することにした。比較的知られている『閻魔大王判決録』と同種のものではあるが、明治流行の十九の「噓」を裏面から巧みに穿って風刺、それぞれに著者の一口評を加えている。扱われたのは、文明開化の明治ならではの、国立銀行、出版社、芸者、新聞記者、半可通、官員、山師、村夫子、雑誌社、講談師、新聞社社長、書生、家令、書記官、学者、番頭、亭主、画工、代言といったバラエティーに富む人物・組織で、そのそれぞれの穴を的確に抉った戯作的作品であった。自らの経歴・体験と広く深い教養があってこそその著述で、近世以来の穿ちの文学の流れを汲んで、当世流行する「噓」を中心軸に据えて明治という時代・社会を完全に活写することに成功し得た作物と言える。これまた今日一顧の価値を有するものと認められよう（後年、内田魯庵の『社会百面相』などの先蹤という見方も或いは可能かと思われる）。

本は、明治十六年に二冊の文字表紙仮綴本として續文舎より出版され、二十二年に安井文欽堂より一冊にまとめられた同じく文字表紙の仮綴本が出、二十四年に瀬山佐吉が原本人不詳として絵表紙のボール表紙本に改題して出版（『人間萬事噓の世の中』）するという経緯があった。續文舎版の初篇は、同じ奥付の物ながら、自序の一字だけ取っても、国立国会図書館所蔵本（科研費で購入し

た一本もこれと同じ物であった)。早稲田大学図書館所蔵本、架蔵本の三通りの異版が認められ、二篇に至っては、同じ内容ながら、奥付だけ国立国会図書館所蔵本と架蔵本で異なるという事実が認められた。安井文欽堂版は、現時点で国立国会図書館しか所蔵していない(原本は、同館関西館が所蔵しており、実地に確認済み)。一方、ボール表紙本化した瀬山佐吉版は、改題と共に著者名を削った一種の海賊版と言ってよい物であり、ボール表紙本としては珍しく、本文ページの途中から袋綴じになるという仕立てであった(これは、科研費で購入した手元の一冊も国立国会図書館所蔵本も早稲田大学図書館所蔵本も天理図書館所蔵本も架蔵本も皆同じであった)。

高瀬真卿の文学的著作物については、まだ論じるべきものがあると思われるので、今回当たりを付けることが出来た他の多くの埋没作家・作品の発掘・再検討と併行して、今後更なる研究・考察を継続的に行う必要がある。

最後に、本課題で収集し得た書物の内、明治二十年前後のボール表紙本の主要な物について、アルバイトを用いて書誌的事項を中心にデータベース化を行ったが、時間の関係で十分なものとは言えず、これも今後の継続的課題といたく考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

池田一彦 「菊亭静『滑稽新話明治流行噺八百』瞥見」、『成城國文學論集』、査読無、第三十六輯、2014年、87 - 133ページ

池田一彦 「南柯堂夢笑道人『法律擬判詐欺』ノート 小説的側面を中心に」、『成城文藝』、査読有、第223号、2013年、56 - 80ページ

池田一彦 「南柯堂夢笑道人『決闘状』ヲ読ム」、『成城國文學論集』、査読無、第三十五輯、2013年、59 - 108ページ

池田一彦 「伊藤里和著『夢想の深遠 夢野久作論』」、『國文目白』、査読無、第52号、2012年、282 - 283ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 一彦 (IKEDA, Kazuhiko)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：10184417